様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３４４１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２２２０

研究課題名（和文）万葉研究の共有化を目指した学際的文献目録の作成

研究課題名（英文）The creation of interdisciplinary bibliography aimed at sharing of Man'yo research

研究代表者
竹本　晃（TAKEMOTO, Akira）

大阪大谷大学・文学部・講師

研究者番号：６０６４７８３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：万葉歌の故地の出土遺構に関する同時代の発掘調査報告書の文献目録、そして万葉歌（題詞・左注を含む）の語句に関連する木簡の抽出を相互に組み合わせた学際的文献目録を作成した。この目録は、上代文学者が手間をかけることなく異分野の関係文献（発掘調査報告書）に辿り着ける便利なツールであり、学際的な研究の土台としての位置づけをもつ。本研究は、万葉歌の解釈において、上代文学・考古学・古代史学の研究者が同じ土俵で議論できるような土台づくりを目指したものである。

研究成果の概要（英文）：I created an interdisciplinary bibliography list combined with each other bibliography of the contemporary excavation report on the remains of places related to the Man'yo songs , and extraction of wooden tablet related to words of Man'yo song (including subject and leftnote) and its source bibliography. This list is a useful tool that ancient literary reserachers can find related literature of different field in a short time , and has a position as a foundation of interdisciplinary research. The intention of this research is to make a common foundation for different fields where researchers of the ancient literary, archeology, and ancient history discuss the Man'yo songs together.

研究分野：上代文学・古代史学・考古学

キーワード：万葉　木簡　地名　人名　考古学　古代　上代

１．研究開始当初の背景

(1)『万葉集』には、歌のみならず歴史的な事柄や詠まれた場所を示す題詞や左注が付されており、本来ならば分野を超えた議論が不可欠なはずである。ところが、『万葉集』の研究は、やはり歌ゆえに上代文学からの考察が中心となっており、古代史学や考古学の立場からいくら学説を提唱したとしても、それらはあくまで他分野の成果としてしか受け止められていない。要するに、上代文学の立場からの考察でなければ、万葉研究における共通の議論になりにくいのが現状であった。

(2)一方で、飛鳥・藤原地域における近年の発掘調査によって、万葉歌に関わる各天皇の宮殿遺構が特定され、同時に木簡も数万点規模で出土しているにもかかわらず、その成果が上代文学側に十分伝わっていなかった。それは、やはり上代文学の立場から考古学の成果を批評するような研究が皆無であることが大きな原因である。一つの歌について、詠まれた地域に関する発掘調査成果があるならば、その報告書をもとに、歌の解釈について複数の分野で議論を深めるべき必要性を感じていた。

(3)これまで新資料がほとんど見込めないと考えられていた万葉研究の分野も、多くの宮殿遺構の発見とともに、木簡などの出土文字資料が飛躍的に増加したことによって活発化するはずであった。ところが、一部の国語学者を除けば、ほとんど用いられないまま現在に至っている。言うなれば、宝の山を放置している状態である。

２．研究の目的

(1)本研究は、古代史学・考古学の手法を用いた、万葉研究者（上代文学）のための支援ツールの作成を目的とするものである。近年、飛鳥・奈良時代の遺構がつぎつぎと発見され、そのうえ十数万点以上の木簡が新たに出土しているにもかかわらず、同時代における万葉歌の再解釈は、ほとんど進んでいない。上代文学側からすれば、分野の壁は想像以上に大きいのが原因であるという。そこで本研究は、古代史学・考古学の成果を援用して、万葉歌の詠まれた社会的背景を捉え直しつつ、万葉歌一首ごとに関連する発掘調査報告書などの文献リストを作成し、万葉研究者が短期間で歌の再解釈に取り組むことができ、共通の議論ができるような土台作りを目指す。対象は原万葉で、文献リストに盛り込むのは、以下の 3 点である。

①万葉歌と出土遺構との関連

飛鳥・藤原地域の発掘調査は、目覚ましい成果をあげており、諸注釈書における明らかな万葉歌の解釈矛盾が目立ってきている。そこで、新たに判明した宮殿遺構をはじめとする出土遺構の成果を万葉研究に盛り込むために、歌の詠まれた場所に関係する発掘調査報告書を集め、上代文学側に広く提示することを目指す。最終的には、従来の解釈を更新しやすいように、歌一首ごとの発掘調査報告書目録を作る。

②万葉歌と出土木簡との関連

近年、爆発的に増加している出土木簡は、出土地とは関係なく、文字から関連性を探ることのできる生の史料と言える。そうした性格に注目し、万葉歌にみられる人物名・物品名・地名などの類例が、同時代の木簡にないかどうかを探す。同時代の生の史料用語の使用方法から、万葉歌の内容を検証することがねらいである。

③万葉歌解釈の方法論の提示

これまで語法や歌句の比較表現から万葉歌の解釈は成り立っていたが、発掘調査が進んだ今となっては、無駄な論争になってしまった議論も多く、しかも、そのことすら十分浸透していない。そうした点に鑑み、万葉歌の解釈における共通のスタート地点を形成するために、本研究において、歌一首ごとの木簡や出土遺構の情報をもとにした、再解釈すべき事例をできるだけ多く提示し、方法論の構築を目指す。

３．研究の方法

(1)万葉歌の歌一首ごとに関係する発掘調査報告書の目録作成が主となるため、『万葉集』の歌番号順に検討を進めていく。対象は原万葉で、初年度は巻頭歌から順に、歌の詠まれた場所の出土遺構に関係する発掘調査報告書のデータを収集する。収集するさいの具体的な方法は、以下の通りである。

①歌が詠まれた地域あるいはその周辺で、過去に発掘調査が行われているか否かを、各自治体の発行する遺跡分布図などを手がかりに調べる。複数の推定地があれば、複数を視野に入れる。

②遺跡名がわかれば、あらかじめ全国の自治体や大学などの図書館データベースで検索し、目星を付けたうえで、報告書を所蔵する図書館に出向き、閲覧して内容を精査する。もし歌に関係していればリストにあげる。

③該当する発掘調査報告書の分析が終われば、現地踏査を行う。現地踏査にあたっては、近隣の博物館や埋蔵文化財センターからも情報を収集し、その遺跡がどのような位置づけで捉えられているかを確認する。この作業は、目録の精度を高めることがねらいである。

(2)巻第１の１番歌から、万葉歌の用語に関係する木簡を探すとともに、その出典である報告書・文献のデータを収集する。『万葉集』

の歌・題詞・左注には、人物名・物品名・地名などが見られるので、関連する木簡は比較的探しやすいが、その一方で、木簡にはたとえば人物名を略称している場合などもあるため、漏れ落ちがないよう注意しなくてはならない。こうした異なる名称も含めて網羅的に探す。関係木簡の具体的な調査方法は、基本的には、奈良文化財研究所の「木簡データベース」を利用する。木簡の総数は、今や把握されているものだけで約 34 万点以上もあるが（奈良文化財研究所の全国木簡出土遺跡・報告書データベース)、「木簡データベース」の項目検索を効率よく活用すれば、ある程度のあたりがつけられる。あたりをつけた後に、報告書の捜索に入る。報告書の入手は難しいが、できるだけ現地に赴き、踏査をかねて収集する予定である。

(3)文字資料である木簡は、出土地とは無関係のように一見思われるが、じっさいには出土した場所との関係がきわめて密接で、研究を深めるためには、現地踏査を避けることはできない。また、木簡所蔵機関の許可がおりれば、木簡の実物調査を行う。釈読の正否も含めて、現物を確認し、同じ遺跡あるいは近辺で出土した木簡とも合わせて、総合的に検討する。なお、地形や地理的な状況の把握のために、現地の学芸員や住民に案内を求めることも考えている。

(4)最終年度は、(1)～(3)を相互に組み込む作業を行う。つまり、歌の詠まれた場所の出土遺構に関する目録を利用して、歌の詠まれた環境を把握し、そのうえで、題詞・左注・歌における語句に関連する木簡の事例と報告書を相互に関連づける作業を行う。この作業は、歌の分析を行うための土台作りに相当するが、歌を詠む状況・条件に絞り込みをかけ、解釈の方向性を定めることを意図している。また同時に、目録のみならず、出土遺構と木簡との検討によって、新たに判明した研究結果を整合させることも、一つの目標である。そして、以上のことを盛り込んだ成果報告書を作成する。

４．研究成果

(1)万葉研究にあたり、古代史学・考古学・上代文学などの諸分野の研究者が、お互いの研究進展を知らず、それぞれの方法論で別々に歌の解釈を立てていた状況のなかに、客観的なデータに基づく共通の土台（発掘調査文献目録）を持ち込んだ。これまでなら、上代文学者は、歌の詠まれた地域に関連する専門外の発掘調査報告書を探し出し、かつ理解しなければならなかったが、本ツール（『万葉研究の共有化を目指した学際的文献目録の作成』）を用いることで、発掘調査報告書を探す手間を省き、最短で学際的な研究ができるようになった。また、歌の解釈については研究史が分厚く、整理に時間を要していたが、発掘調査の成果によって淘汰されるべき議論も浮き彫りになってきた。そのことにより、歌の解釈の方向性を定められたことも大きな研究の進展である。

(2)歌一首ごとに、歌の語句に関連する木簡の事例をあげた。ただし、網羅的にはせず、各歌の詠まれた時代に限定し、かつ早い時期のものを掲載した。『万葉集』の諸註釈書においても、語句一つ一つについては注意が払われていないので、木簡の事例をあげれば、同時代に用いられている語句であることがわかり、不毛な議論は減るだろう。解説では、木簡の出土遺構の解釈や年代観についてもできるだけ記載した。

(3)本成果は、たんなる発掘調査報告書のリストではない。関係する発掘調査報告書を厳選して抽出し、かつそれぞれに書かれている内容とともに、どのような位置づけにあるかなどのコメントをつけている。正確なデータやビジュアル表示などは、書物の性格によって異なるため、そうした点に配慮したコメントを解説のなかで記した。また、出土遺構の解釈にも踏み込み、万葉歌と合わせて総合的に検証することで、上代文学のツールとしてのみならず、考古学としての新研究にもつながった。

(4)成果報告書『万葉研究の共有化を目指した学際的文献目録の作成』の作成準備段階で、個別に公表した研究成果の概要は以下の通りである。

①「軍王の万葉歌と城山」は、『万葉集』巻第１の５・６番歌を対象としたものである。これらの歌は、舒明天皇が讃岐国阿野郡に行幸した時に山を見て詠まれた歌とあるが、語句の使用方法が柿本人麻呂のものと似ており、作歌時期が新しいとされてきたこと、そして、じっさいに詠まれた場所はどこかなどが、これまでの大きな論点であった。
前者については、古い時期の木簡の使用例から柿本人麻呂以前とみてもよいと判断した。後者については、これまでの研究では、発掘調査成果をまったく含めない議論であったため、近年進んできた讃岐国府跡の発掘調査成果をまじえて５・６番歌を検討した。その結果、讃岐国府跡の下層にある国府前身の遺構こそが行幸地そのものであると推定し、かつその地で歌が詠まれたとみた。
この時の行幸は、眼前の神籠石系山城である城山との関係を重視すると、城山城の建造にかかわる行幸と推定される。

②「万葉歌の人物の特定に向けて―佐伯赤麻呂と門部王―」は、二つの問題を検討したものである。一つは、『万葉集』巻第 3 の 404～406 番歌にみえる佐伯宿祢赤麻呂についてである。佐伯宿祢赤麻呂は、万葉研究の世界

では有名でないものの、数首の歌が収録され、春日野での贈答歌が残されているので、それなりに知られた人物ではある。
ところが、平城京から出土した木簡にその名が記されていたことを万葉研究者たちは見逃していた。ただし、「木簡データベース」にはふつうに入力しても検出されない状態であった。なぜ検出できないかはわからないが、データベースばかりに頼ってはいけないという一つの警鐘であろう。また、出土した場所や共伴する木簡の内容を、歌に関連づけて解釈できることを提示した。
もう一つは、二人の門部王についてである。奈良時代に門部王が二人いて、『万葉集』巻第 3 の 310・326・371・巻第 4 の 536・巻第 6 の 1013 番歌に収録されている門部王が、それぞれどちらの門部王であるかが従来から問題となっていた。木簡からわかる経歴と、題詞・左注などを手がかりに検討し直すと、すべて片方の門部王（天平 11 年に大原真人門部に改姓）であることが明確となった。
もう片方の門部王は、長屋王の弟で、長屋王家木簡にみえる。従来は、「東大寺開田地図越中国三郡墾田野地図」(神護景雲元年 11 月 16 日付)にみえる「門部王所」の門部王は、人名の表記上、長屋王の弟の方だと考えられてきたが、改姓されたからといって、土地の表示である「門部王所」まで変えるとは思えない。「門部王所」の記載は、かつての土地所有者として用いられており、また同姓（大原真人）の者たちが近隣の土地を所有していることから、大原真人門部の方の門部王を指している可能性が高い。

③「あさなぎ木簡を刻んだ人―その性別と階層―」は、万葉歌と同じ歌が書かれた「あさなぎ木簡」が出土したことで、さまざまな意見が提示され、そのなかで恋愛成就を祈願した女性によって刻まれたという見解が出された。本稿はこれに対する反論である。まず歌の語句や用法から、男性が詠んだか女性が詠んだかは意見が分かれ、決め手がないことを指摘した。一方で、木簡の出土状況をみると、この場所は頻繁に官衙建物や溝などが作り替えられているところで、その最中に木簡が捨てられている。とても恋愛成就を祈願した女性が入ってこられるような状況ではない。文字の記し方からすると、「あさなぎ木簡」を刻んだのは、歌を熟知した官人というより、あまり知らない工人か仕丁ではないかと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①竹本　晃、軍王の万葉歌と城山、大阪大谷大学歴史文化研究、査読無、18 号、2018、pp.83-93

②竹本　晃、万葉歌の人物の特定に向けて―佐伯赤麻呂と門部王―、大阪大谷大学歴史文化研究、査読無、17 号、2017、pp.21-37

③竹本　晃、あさなぎ木簡を刻んだ人―その性別と階層―、美夫君志、査読有、91 号、2015、pp.41-51

〔学会発表〕（計２件）
①竹本　晃、『新撰姓氏録』の系譜構造、成城大学民俗学研究所共同研究「日本古代の氏（ウヂ）と系譜」（平成 27～30 年度）〔研究代表者：篠川賢〕、2017

②竹本　晃、古代における石上神宮の神庫の管掌、國學院大學国史学会大会、2015

〔図書〕（計１件）
①竹本　晃、大阪大谷大学、万葉研究の共有化を目指した学際的文献目録の作成 平成 27～29 年度科学研究費助成事業 基盤研究(Ｃ)研究成果報告書（研究代表者：竹本晃）、2018、43

６．研究組織
(1)研究代表者
竹本　晃（TAKEMOTO, Akira）
大阪大谷大学・文学部・講師
研究者番号：６０６４７８３２